慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	青年が「志願」に至るまで：周金波「志願兵」論
Sub Title	
Author	和泉, 司(Izumi, Tsukasa)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2005
Jtitle	三田國文 No.41 (2005. 6) ,p.11- 41
JaLC DOI	10.14991/002.20050600-0011
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20050600-0011

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

青年が「志願」に至るまで——周金波「志願兵」論

和泉　司

周金波「志願兵」を巡る状況

周金波（一九二〇—一九九六）という作家が台湾に登場したのは、一九四一年三月である。そのデビュー作は「水癌」、掲載誌は当時台湾で発行されていた日本語文芸誌『文芸台湾』[1]であった。

デビュー当時の周金波は東京に暮らしていた。十三才の時東京の日本大学附属第三中学校に入学した周金波は、そのまま日本大学歯学科（現歯学部）に進学していた。「水癌」を投稿し採用されたのは、その卒業間際の時期であり、そして卒業直後、二十一才の時に彼は帰台し、結婚をしている。父の経営する歯科医院を継ぐためであり、その結婚もまた父の希望であった[2]。

周金波は、歯科医をつとめながら作家活動も続けた。その帰台後第一作が「志願兵」である。「志願兵」は、従来日本帝国の徴兵制度の枠外に置かれていた台湾人を、日本人との権利的不平等を維持したまま戦場に動員するため実施された「陸軍特別志願兵制度」をモチーフにしたテクストである。そして、この「志願兵」は、結果的に周金波の作家としての人生、いやおそらくは人生そのものを決定づけるテクストとなった。

「志願兵」への注目をきっかけに、周金波は四〇年代の台湾で多くの執筆機会とメディア露出を果たし、第二回大東亜文学者会議に台湾代表として参加するまでになった。一方、このテクストのために——おそらくは、「志願兵」という題名「のみ」によって[3]——、戦後[4]の周金波は「皇民作家」という非常に重い枷を背負うことになり、一切の文筆活動を絶つことになるのである。

東京留学中で一時帰台した張明貴が、公学校時代の同窓生で、今は日本人経営の商店で働きながら、「報国青年隊」で勤労奉仕している高進六と、「日本人になる」方法論を戦わせる。当初は高進六の「神がかり」的な日本人化論を批判した張明貴は、自身が「日本人になる」ことにこだわるのは、「日本人でなければ、生きていたって仕方がない」という「計算」故であったが、高進六が志願兵に血書志願をしたのを新聞報道で知り、自身の敗北を認め、日本人化への道を考え直すのだった——多くの先行研究がまとめる「あらすじ[5]」は、大方がこのようなものになっている。そしてそれらで注目されるのは、張明貴が語る「日本

人にならなければいけない理由」と、高進六の「血書志願」という手段との二点に集約される。

前者への注目は、一九九〇年代以降、台湾で急速に高まった台湾意識[6]と、その動きを見据えるポストコロニアリズムという研究動向とに起因している。つまり、張明貴が「日本人にならなければならない」と思い詰めるのは、日本植民地統治による圧政の極北であり、このような台湾人青年の懊悩の背後には、台湾人であるという意識が働いているからだ、という論理になる。

この論理展開は、当初は周金波という作家とそのテクストを「解放」するための方法論であった。

周金波とそのテクストは、中島利郎が厳しく指摘しているように、国民党統治開始以降の台湾において、「皇民作家」「皇民文学」の代表とされ、完全に黙殺されていた[7]。そこには、周金波以外の日本統治期の台湾人作家を救済するため、彼とそのテクストをスケープゴートとした構造が見え隠れしていた。たとえば、戦後の台湾でほとんど最初に周金波について言及した葉石濤は、その代表的著作である『台湾文学史綱』[8]において、周金波を次のように評している。

> 戦争の影がいよいよ濃くなり、皇民化運動の波が次第に激しくなった時、理念の上で植民地政府の政策を認め、親日に向かった作家たちもいた。たとえば、「志願兵」や「水癌」等を書いた周金波である。[9]

一九四〇年代の「日本語文学」最盛期に活動していた他の台湾人作家たちが、一九七〇年代の「郷土文学論争」[10]などを経て再評価を受けるようになった中でも、周金波への言及は避けられていた。時に触れられる場合は、この葉石濤のように、他の作家たちの「再評価」と対置させるために「皇民作家」であることを強調されるばかりであった。故に、「志願兵」は「読む対象」としてさえ認められていなかったのである。九〇年代に、日本の研究者によって行われた作業は、まずこのような状況にある「志願兵」を「読む対象」に引き上げることからスタートしなければならなかった。

そのような中で、「志願兵」の張明貴に、台湾意識と日本人化との間の軋みを見いだすという作業は、「皇民作家」「皇民文学」と断罪されるだけであった周金波とそのテクストの中から台湾意識が存在することを確認することによって、「台湾の作家」「台湾のテクスト」として受け入れる突破口を与えるものであった、といえるだろう。その嚆矢は星名宏修「もう一つの「皇民文学」・周金波」[11]及び垂水千恵「周金波論」[12]であった。星名は周金波による一連のテクストを通観して、そこから全体像として「皇民作家」周金波像の「それ以外」の側面に言及し、垂水はそこで張明貴の立場を台湾と日本とに「引き裂かれたアイデンティティ」と表現することで、「志願兵」、ひいては周金波とそのテクストを、文学研究という「表舞台」に引き出したのである。

後者の注目点、高進六の「血書志願」も同じ文脈で分析が行われた。志願兵になることを願う、それこそ血書をしてまで志願兵になりたいと考える姿は、「日本人になること」を至上命題

として追いつめられた台湾人青年の精神の現れであり、台湾人青年が「日本人になれる」のは、「日本兵として死んだ」ときに他ならないのである、と。

先に触れた中島は、「皇民作家」としてスケープゴートとされた戦後の「つくられた周金波」像を明らかにしている点で流れを異にしているが、しかし周金波を「愛郷土、愛台湾作家」と設定しようという試みは、周金波とそのテクストから台湾意識を「発見」し、「台湾文学」という枠組みの中に措定しようという点において、方向性は一致しているといえるだろう。

あらかじめ言っておくと、このような先行研究の成果は正しく評価されるべきものであり、ここで論じようとしていることは、その否定ではない。垂水や星名、中島による先行研究がなければ、おそらくこの場で「周金波」を取り上げる契機は訪れなかっただろう。それだけ「周金波」は黙殺され埋没していたのだから。

しかし、そのような「黙殺され埋没していた」という特殊な経緯によって、周金波とそのテクストの研究動向が、台湾意識との関連性に限定されるようになってしまったことも事実である。つまり、先行研究のほとんどは、基本的には周金波とそのテクストの「復権」を意図していて――本稿もその意図を持っていること否定しない――、そして「復権」の要件を、「台湾文学」として認められること、に求めているのである。周金波とそのテクストに、台湾意識や台湾への愛着、郷土愛を見いだそうという先行研究の姿勢には、その傾向がはっきりと見て取れる。

「接続詞」としての台湾意識

ここには、一つの前提がある。すなわち、「台湾文学」という枠組が存在していて、その「台湾文学」に回収されるテクストとは、台湾意識に裏打ちされたものでなければならない、という前提だ。

現在の「台湾文学」研究は、基本的に作家とテクストに台湾意識を認めることが出発点となっている。そこでは、例えば楊逵[13]や呂赫若[14]、張文環[15]と言った作家とそのテクストが常に高く評価され、そして四〇年代に彼らが所属した文芸誌『台湾文学』[16]は台湾意識を堅持したという点で優位性が認められる。一方、彼らと対立していたとされる『文芸台湾』は、運営者が在台日本人資産家の息子・西川満であり、同人の多くが日本人であったということと、それに関連して総督府に近かったという「御用性」によって、常に批判されることがその評価の出発点になる。

ここで、本論の目的を示すことにしよう。

「志願兵」というテクストは、以上に述べたように、その論点が著しく台湾意識と日本人化の軋轢の部分、つまり垂水がいう「引き裂かれたアイデンティティ」の問題に偏っているが、その論点に拘泥するあまり、このテクストの抱えているその他の様々な問題点が全く顧みられなくなっている。今回目指すのは、そのような周金波「志願兵」の中に生じた新たな「黙殺され埋没した」問題を分析し、「志願兵」というテクストの可能性を示すことにある。

そしてそれは同時に、台湾意識の「所在探し」に陥りかねな

い現状の「台湾文学」研究、および「台湾文学」という枠組への問題提起でもある。特定の時空を範囲として区画した文学カテゴリー――例えば、「日本文学」であったり「中国文学」といったもの――が、その区画された時空内を支配するナショナリズムによって管理され定義されるものであるとするならば、「台湾文学」はまさしく現在そのようなあり方を意図して展開している。

その展開自体について、ここで是非を問うことはできない。[17] が、「台湾文学」研究の現状は、台湾意識に拘泥するあまり、テクスト自体への検討が等閑視されている状況をも生み出すであろう。それは、「台湾文学」形成に対して是非いずれを問う立場であったとしても、望ましいことではないはずだ。なぜなら、そこでは決定的にテクスト評価の空洞化が生じるのだから。

「志願兵」は、先にも述べたように、周金波という現在までもその位置付けにゆらぎの残る作家の代表作である。今回「志願兵」を取り上げるのは、まさにこのテクストがそのような立場にあるからだ。

「志願兵」を「テクスト」として分析することには、台湾意識との連動が強い現状の「台湾文学」研究、および「台湾文学」形成への一つのカウンターとなる可能性がある。今回は、その可能性の一端でも示すことを目指している。

制約ある「私」の語り

「志願兵」[18] の主な登場人物は、語り手である「私」、その義理の弟で東京留学中の張明貴、張明貴の公学校時代の同級生で食料品店で働きつつ「報国青年隊」に所属している高進六の三人である。

この中で、先行研究の多くが「志願兵」の問題点を張明貴と高進六を中心に据えて論じる中、閑却に近い扱いを受けているのが、語り手の「私」である。[19]

しかし、語り手「私」は、八年前に台湾へ戻ったという東京留学経験者であり、現在は台湾の旧慣的社会に順応している生身の人間でもある。故にその語りは、「私」の経歴や立場によって制約を持っている。

テクスト内の年代は、改姓名[20]や一九四一年六月二〇日に発表された陸軍特別志願兵制度がすでに知られている記述から、同日以降であることがわかる。陸軍特別志願兵制度によって実際に志願兵が招集されたのは四二年であるが、張明貴の言動から、実際の招集は始まっていないと考えられ、また、張明貴が夏期休暇を利用して帰台していることから、このテクスト内部の時間は、一九四一年の夏、張明貴の通う日本内地の専門学校の夏期休暇期間、大体七～八月頃と仮定することができるだろう。

このとき、「私」の帰台した「八年前」は一九三三年頃となる。「私」が何歳で台湾へ戻ってきたのかもまた判然としないが、三〇年代前半に東京で学業を終えた、という点は、「私」という人物にとって非常に重要な条件である。

なぜなら、その時期までを東京で学生として過ごしたということは、「私」は東京在学時代に、本人が参加していたかはともかく、日本内地で展開されていた多くの労働運動、組合運動、農民争議などを見聞きしたはずであり、同時に台湾人・朝鮮人

留学生等による植民地統治に対する抗議運動も間近に観ていた可能性が非常に高いからだ。

（略）その瀟洒な高砂丸の姿態に見とれながら私は暫し感慨に耽つてゐたのだつた。

八年前まで私をそのやうにして運んでくれた船は吉野丸級であつたがそれでも学生時代の甘へ気たつぷりな夢をかなり育ててくれたことを想ひ出すのだ。錦を飾つて故郷に帰つた、その最後の船はたしか朝日丸だと覚えてゐるが私は何故か出迎への人たちの熱狂を他人事のやうにうけながして暗い陰鬱な気持で船を降りたのだつた。孤独に、そして自由に暮してきた永年の東京生活に別れをつげた一抹の哀愁がどこかに潜んでゐるのかも知れなかつた。孤独は淋しいものにせよ、自由は危いものにせよ私はそこに生き甲斐を感じてゐたのだつた。

テクスト冒頭で、「私」はこのように述べている。同時代における「自由」という言葉が、全体主義社会において忌避されていたことを考え合わせれば、「私」がこの「八年前」の回想において「自由は危ういもの」「にせよ」「そこに生き甲斐を感じてゐた」と述べるのは、その人物像において重要な意味を持つ。なぜなら、一九三〇年前後という時期は、東京―台湾での対日権利獲得闘争の高揚と途絶の時期と重なっており[21]、そのような状況下で「私」が何らかの運動・思想に魅力を感じていた、あるいはシンパシーを持っていたことが示唆されるからだ。

そしてそのような「私」が冒頭であらわにする東京時代の回想が、個人的な感覚ではなく、「私」の属する世代階層に共通の感覚であることが示される。それは、「私」の回想が「基隆港」に入港する内台航路船によってもたらされていることから判断される。

「基隆港」と内台航路の代表船である「高砂丸」の持つ象徴性を捉えておこう。当時の台湾と日本内地を結ぶ主要ルートである内台航路船は、基隆―門司―神戸に固定されていた。つまり、内地留学経験者にとっては、進学先が内地の何処であっても、このルートが内地行の共通体験としてあり、「私」はその共通体験によって「東京」を回想しているのである。「私」は基隆に住んでいる人間であり、故に高砂丸をはじめとする内台航路の船を目にすることはさほど珍しいことではない（基隆の街は港と近接する鉄道駅のすぐ周辺に広がっている）。それが、張明貴の出迎え時に限って回想が始まるのは、「東京」回想のためには、新たな共通体験保持者である張明貴がその船に乗っている、という因子が不可欠なのだ。

つまり、「東京」回想は、内地留学経験者という台湾人インテリ層の集団経験に裏付けられたものとして「私」の中に存在しているのである。

そうであるとき、「私」の認識もまた、「私」特有のものではなく、同時代の「私」が属する世代の内地留学経験者との共通性を持つものとなる。張文環の「地方生活[22]」や王昶雄の「奔流[23]」、そして呂赫若の「清秋[24]」などでも、スタンスは異なれど「東京」から「台湾」に帰る、という行為が、単なる地理的移動に留ま

らず、自身の文化的社会的価値観の解体－再構築を迫られる事態であるということが示されている。このような帰台インテリ像は例外なく「東京」と「台湾」との間の文化や生活習慣上のギャップをいかにして埋めていくか、という命題を突きつけられていくのである。

そのように考える時、例えば垂水が指摘する「私」と、そして四一年の夏に一時帰台した張明貴を表現する、台湾の旧慣を批判しその改造を志向する「近代主義者」という人物像は、それ自体は間違っていないとしても、特にテクスト「志願兵」に特殊に現れた人物像ではなく、同時代の留学経験インテリ層に共有されている感覚の現れと言えるだろう。「私」とは、このような世代・階層・経験に属す存在であり、テクスト内に生身を持たないいわゆる「透明な語り手」とは異なる。「私」の語りは、台湾人であるということはもちろんだが、その上に当時の台湾における世代・階層・経験という制約の中で述べられていることを、最初に確認しなければならない。このとき、テクスト全体に渡って、常に意識しなければならないのが、各場面における「私」のスタンスであることに気づかざるを得ないのである。

「私」の認める価値観

そのような「私」の経歴的背景を踏まえ、次に現在の「私」の感覚・価値観に戻ってみたい。

まず「私」に顕著にみられるのは、学歴に対するこだわりである。「私」は張明貴を待つ基隆港の待合室の中で高進六と出会い、会話を交わすことで、高進六の学歴を「T中出」であり、自身と「先輩後輩」であるという。

「――明貴と同窓だつたですか。ちつとも知らなかつた。僕もT中ですからお互に先輩後輩ですな」

へんにうちとけた気持で私は彼に隣の席をすゝめた。好感の持てる青年だつた。

すると彼は困惑さうに、でもきつぱりと、

「いゝえ同窓といつても公学校時代のです。僕は高等科しか出ておりません」

「さうでしたか、あなたの国語が余りお上手なものだから僕はいままでさうだとばかり思つてゐましたよ」

これはお世辞ではなかつた。しまつた、とは私は思わなかつた。

ここにはまず、「私」が自身の学歴を殊更に披瀝している様子がうかがえ、同時に、学歴を共有することによる共同体意識の強さが読みとれる。

しかし、高進六は「T中」[25]出身者ではなかった。「私」は張明貴と同窓であることと、日本語能力の高さによって、高進六の学歴を規定したのであるが、あらかじめ「公学校時代」の「同窓」という条件は捨象していたのである。「私」は高進六が自身の学歴を表明する様子を「困惑さう」にしていたと見、そして学歴を間違えたことを「しまつた、とは私は思はなかつた」と表現することで、逆説的にそれが「失敗」であったことを認める。また、ここに続けて「私」は「彼の礼儀正しさに接したひ

となら誰しも彼を中等学校以上の出だと独り決めするに違ひないのだ」と、自身の間違いについて弁明を述べるのであるが、学歴と「礼儀正しさ」が対応するものと弁明するところにも「私」が価値をおいているものが見えて来るであろう。

「私」が張明貴に高進六の日本語能力の高さについて確認する際の言葉も、この傾向の裏付けとなる。「私」は張明貴に、高進六の日本語能力について次のように質問する。

「(高進六は―引用者註) 国語がうまいね。内地人かと間違へたほどだ。御両親は内台結婚なのかい」

先に引用した通り、「私」が「間違へた」のは高進六の学歴であって、日本人・台湾人の別ではない。「私」にとって、日本人・台湾人の別を間違えることよりも、学歴の方が重大なのである。だから「私」は「T中出かと間違へたほどだ」とはいわないのだ。

同時に触れておかなければならないのは、そのような「私」が同世代の台湾人インテリ層に対して持っている反感である。「私」は、テクスト冒頭で張明貴の日本での成長を期待する、と述べる中で、次のようにいう。

どう贔屓目にみても本島からいつてゐる在京留学生の中には凡庸の子弟が多く目につくのだつた。彼等は年期があけると夫々にインテリの呼称と学士号の看板を高く掲げて錦を故郷に飾るが実は内味(ママ)に何も持つてゐはしないのだ。私もその例外に漏れない一人だが自分が直接経験しただけにさういふ人たちに台湾の文化まで牛耳られることはたまらないことだつた。

自らを「私もその例外に漏れない一人」と述べるように、「私」のここでの主張は近親憎悪にも近しい。なぜ、「私」は、留学経験を共有しているであろう集団に対し、このような表明をなすのだろうか。

表層的な指摘をまずすれば、ここには「例外に漏れない」といいながらも、実際には「凡庸な子弟」たちと同一視されたくない、というプライドによるだろう。東京留学生がいわゆる「堕落」した生活に陥る、という指摘は、当時の文学テクスト、のみならず、広く一般に流布していた概念でもあった。それだけに、その内部では、留学生の差異化を図る言説も存在している。[26]

しかし、原因をそれだけに求めるには、ここでの「私」の指摘はもう少し具体性を帯びている。「私」が蔑視するのは、「インテリの呼称と学士号」の誇示だけでなく、「さういふ人たちに台湾の文化まで牛耳られることはたまらない」という点だからだ。

ここで、同時代に「台湾の文化」建設を高々と掲げていた東京留学経験のある台湾人集団、として思い出されるのは、言うまでもなく『台湾文学』派とされている台湾人作家達である。

季刊文芸誌『台湾文学』が、『文芸台湾』との同人分裂を経て創刊されたのは一九四一年六月。そして「志願兵」が掲載された『文芸台湾』と同じ九月に創刊第二号が出版され、その巻頭

論文が、『文芸台湾』の中央文壇志向を批判し、台湾文化の樹立などを訴える黄得時「台湾文壇建設論」であった。一九四一年は、台湾の文学運動が二派に割れて揺れていた時期であり、そして「台湾文学」「台湾文壇」の定義が争われていた時期だったのである。「志願兵」はそのような最中に発表されたテクストでもあるのだ。つまり、この「私」の主張は、そのような同時代の台湾の文化状況を反映しているのである。

「私」とその世代

そして同時に覚えておくべきことは、「私」が次のような自己認識を持っていることにある。

> 錦を飾つた、といはれたとたんに私は赤煉瓦の床に根を下しはじめてゐたのだつた。職業と家庭生活の煩瑣は忽ちにして私を赤煉瓦の中に封じ込んでしまつたのだ。

垂水の指摘通り、赤煉瓦とは台湾社会の暗喩である。[27] つまり「私」は、彼にとって近代の象徴でもある東京生活から、前近代的な台湾社会に取り込まれていることを示しながら、一方で台湾の文化状況へのまなざしを失わずにいる、ことをここで示しているのである。

このような二律背反した「私」の姿勢には、自身の現状への諦観と、自身の能力への自負、その双方がない交ぜになっている精神状況が現れている。「私」の年齢を三十代前半ほどと推測するとき、[28] 彼は一九一〇年前後の生まれで、ほぼ『台湾文学』派の中心メンバーの年代と一致する。そのメンバーに代表されるような、内地留学経験者の中でも自身の能力に自信を持つ者は、おそらくは東京で先進的な文化・思潮に触れ、帰台の際にはそれこそ「インテリの呼称と学士号の看板を高く掲げて錦を故郷に飾る」意識を持っていたであろう。「遅れた台湾」を「進んだ知識」によって改革するのは自分たちである、という意志さえ持っていたかもしれない。[29]

しかし、多くの帰台青年たちは、家族と家庭の関係性を「改善する」に及ばない。心に抱いた「社会改造」の志は、「東京」という彼らにとっての「非日常」の時空であったからこそ描けたものにすぎなかったからだ。「私」は、そのようなおそらくは大多数の帰台青年のステレオタイプとして描かれている。

そして、そのようなステレオタイプの「私」にとって、台湾に「ありながら」、文化運動、文学刷新といった「進んだ」主張を続けている集団は、「なりたかった」が「なれなかった」「自分」であり、共感よりも反感を強く感じる存在であったのである。

そのような「私」は、おそらくはこの「反感」を身近にいる「進んだ」青年である年少の張明貴にぶつけていくことになる。冒頭から「私」は未だ絶えない「東京」への想いを述べ続ける。それは、内台航路船という共通体験事項からだけではなく、張明貴の買ってきた土産物にまでいちいち反応してしまう程過敏なものである。

「私」は張明貴が船を下りてくるまで、「私」は彼に大きな期待をかけている、と述べていた。しかし、張明貴と二人きりに

なるとほぼ同時に、張明貴から批判されることを恐れ始め、決定的に張明貴への態度を反転させていく。

張明貴からの批判を恐れるのは、過去の「私」からの批判を恐れることとほぼ同義である。

「そんなものだよ、大人の社会といふものは、僕も帰つた当初はムキになつて苦しんだがもう馴れてしまつた。馴れてしまつたといふより不感症になつてしまつたよ」

「不感症になつたか。それぢや台湾は変りつこないな。ミイラ取りがミイラになつたつて義兄さんのことぢやないかなあ」

「さう思われても仕方がない。旧い殻はなかなか固いのだ。その殻を容易に破けると思ふのは、それはしかし君の感情の若さといひたいよ」

いまでこそ私は赤煉瓦の床に根を下してしまつたが、これでも帰台当初は明貴にも負けない大きな抱負と高い熱情をもつて、旧い殻を破らうと試みたのだ。さう私はいつてやりたいのだつた。

「感情の若さかなあ。僕は精神の若さだと自慢したいところだが」

と彼は傲慢に構へた。

「私」はかつて持っていた台湾を改善しようという志を放棄してしまったことへの挫折感にとらわれ続けている。そしてそれを張明貴に指摘される形で自己批判を迫られることを恐怖しているのだ。

そして、実際にこの場面以降、「私」は張明貴に対して非常に冷淡になっていく。特に、後の張明貴が高進六の主張に反発する場面では、張明貴の様子を「自己の可愛らしい感情へのこだわり」と述べるなど、張明貴のあり方を感情的なものと一蹴するようになり、ことごとくに批判的に述べるようになるのである。

一方、「私」が張明貴に批判的になる、その反映として、「私」の語りは高進六寄りへと変わっていく。それによって、テクストは一見、高進六の「神がゝり」な主張を肯定しているかのような様相を呈し始める。しかし、「私」という語り手は決して公平でも客観的でもなく、個人的な価値観や情緒に左右されていることを見落としてはならない。テクストに織り込まれた事象は、必ずしも高進六を肯定的に描いているものではない。「私」の感情的な志向が機能しているとしても、それは結局明らかになっていくのである。

偽装の親友像ー張明貴と高進六

「志願兵」の先行研究の中で一切疑いをもたれていないことに、張明貴と高進六の友情がある。張明貴と高進六は「日本人」になる、という「同じ目標」を持っている、とされている。たしかにテクストでは、高進六も、

「僕達は明貴が上京するまへから同じ目標をたててきたんだ。その目標はいまでも同じだといふ約束は議論すると

きに断つておいたから間違ひはないのだが、こんがらかつてゐるのはその目標に辿りつくまでの経路なんだ。明貴は僕のゆき方が神がゝりだと言ひだしたんだ」

と発言している。ここで検証すべきは、張明貴と高進六、それぞれの目指す「日本人」像の異同である。張明貴と高進六の二人は「日本人」になることを「同じ目標」である、としているが、同時に「目標に辿りつくまでの経路」は「こんがらかつている」とも述べている。しかし、二人の議論を追う時、「こんがらかつている」本当の原因は「経路」ではなく、それぞれが目指している「日本人」像が共有されていないことにあるのだ。

ここで二人の友情を同時に検討する必要がある。それは、二人の「日本人」像の異同が、二人の関係性、そして関係性を生む背景にかかわっているからであり、それらは友情の形の検討によって、明らかになるからだ。

高進六は、「私」にしか知らされていないはずの張明貴の帰台が告げられていたり、家族にも出していない手紙を受けとったりもしている。先ほど挙げた「同じ目標」を共に掲げていることや、張明貴が「私」に対して「ずつと親しくつきあつてゐる」「僕のたつた一人の知己だらうな」と高進六について伝えている。このような条件を並べると、二人が親友であることは疑いないように思われる。

が、であるならば不可解な態度を張明貴はとっている。台湾までの船旅の経験を「羨しい」という高進六に対し、張明貴は「鼻であしらふやうなものの言ひ方」をする。

また、基隆港からの帰り道、張明貴は「私」に高進六が「高峰進六」と名乗っていることを告げる。

「高峰進六？」

と私は訊きかへした。

「進六は僕たちの間では高峰といふ姓を名乗つてゐるんだよ」

とどうした拍子かゲラゲラ笑い出した。私にはその意味がわからなかつた。

「はあ、改姓したんだね」

「いや改姓許可以前さ。なんでもその店（高進六の働いている店－引用者）に高峰さんといふ番頭がゐてよく可愛がつてくれたのでその人を義兄とよぶやうになつたさうだ」

「ほう感心だね」

と私がいつたとき明貴は「フン」と鼻先で何かいつたやうだつた。

高進六が日本人的な姓を自称していることを、なぜ張明貴は「ゲラゲラ笑」わなければならないのだろうか。高進六をあざ笑うかのようなこの振る舞いには、少なくとも対等の友人に対する敬意は全く感じられない。しかも張明貴は、「私」が自称であっても日本人的な姓を名乗ろうとする高進六を「ほう感心だね」と評価するのに対し、「フン」と子供のように反応している。

この場面から伺えることは、張明貴は高進六を友人と考えているとしても、それは対等な関係ではなく、そこにはっきりと

上下関係を導入していることである。つまり、張明貴は高進六を自分より立場・地位・能力が下位の人間と理解しているのだ。

このような高進六評価は、中盤以降高進六寄りの語りを続けていく「私」にも、実は共通している。先に示したように、「私」は学歴序列意識の中で高進六を位置づけており、同時に、自身と同程度以上の学歴を共有していない人間を、対等の人間として捉えようとしていない。

それは、「私」の語り方からはっきりしてくる。「私」は張明貴に対して冷淡になっていくが、しかし、語り手として、自身の主観に依りながらも、張明貴の心理を推測し語ることを最後まで諦めない。しかし、冒頭から最後まで、語り手であるにもかかわらず、「私」は一貫して高進六の心理には触れないのである。

故に、「私」は張明貴と高進六の議論の場に同席し、両者の主張を聞く中で、張明貴の発言についてはいちいち批判を加えたり、発言背景を推測していながら、高進六の発言には何の評価も与えないのだ。

つまり、一見「私」は張明貴の主張を批判し、高進六の主張を認めているかのような印象を与えるが、「私」が求めているのは張明貴への批判のみであって、高進六はもともと評価の対象にすらなっていないのである。「私」が張明貴批判に固執するのは、それだけ張明貴から受けた批判が自身に応えているからであり、先に述べたように、「進んだ」青年に対する反感故であろう。がその批判は、同時に、批判するに足るだけの相手として張明貴を認めていることでもあるのだ。高進六はこのとき、効果的に張明貴を批判するための材料に過ぎないのである。

「議論」という虚構のやりとり

張明貴と高進六の議論を細かに見ていくと、両者が異なった経歴・背景によって、異なった立場にいることを認識した上で発言していることがよくわかる。

高進六は、張明貴の主張を「科学一てんばり」といい、「ユダヤ信者」「西洋カヴレ」という。逆に言うと、高進六はこれ以上の反論を張明貴に対してなし得ていない。先ほどから二人の議論、と表現してきたが、発言内容を読み直せばすぐにわかるように、二人の間では実は議論など全く成り立っていないのである。なぜなら、高進六は張明貴の反論に一切応えず、「祈る」ことの絶対必要性を繰り返しているだけだからだ。

張明貴は議論の中で次のような発言を続ける。

「君は僕をユダヤ信者とか西洋カヴレだとか罵つたぢやないか」

（略）

「自由自由なんて僕はいひやしないよ。それを進六は誤解してゐるんだ。台湾の文化が日本の一地方文化であるべきだといふことは賛成してゐるんだよ」

（略）

「たゞね進六の話し振りでは余り神がゝりで僕の頭では承知できないのだ」

一方、高進六の主張は、次のような発言に集約されている。

「（略）拍手を打つことは神々によつて導びかれ、神々に近づくことなんだ。至誠神明に祈つてはじめて神人一致といふことができる（略）祭政一致は皇道政治の根源ぢやないか。我々隊員（高進六の所属する「報国青年隊」員のこと―引用者）は拍手を打つことによつて大和心に触れ、大和心を体験することに努めてゐるのだ。（略）」

（略）

「しかも我々は理論を最も排撃する。祈るのみ、行ふのみ。行はずば得られない。この信条が我々隊員間をますます結束させてゐるんだ」

（略）

「君（張明貴―引用者）の科学一てんばりの頭では神がゝりだといはれるのも仕方ないさ。しかし我々は拍手を打つことによつて一つの信念に生きてゐるんだ。信念の問題だ。日本人に立派になり得る信念だ」

「その信念が拍手を打たなければ得られないと思ふのが僕の頭では承知できないのだ」

「いやちがふ、日本人的信念なら拍手を打つことから生れる。我々は飯を頂く時に拍手を打つ。戦ひに出るときも拍手を打つ」

このように、張明貴の近代人意識から来る主張は、高進六による論理の排除あるいは忌避によって全て空回りしていく。

このような非建設的なやりとりが、例えば中島などの先行研究で高進六の主張が肯定される、と理解されている。しかし、そのような印象をテクストが与えるのは、議論が成立していないにもかかわらず、「私」が高進六の非論理性を隠蔽し評価する語りを続けているからである。「私」は語り手として、両者の議論に立ち会う中で、

僕の頭では承知できないのだといふ明貴の頭のなかも何だかわかるやうな気がするのだつた。がそれより進六の考へてゐることの方が体形をなしてより私にはわかるのだ。

と述べている。しかし、高進六の主張にどのような「体形」が備わっているのかは、決して語らないのである。何故かといえば、高進六の主張にそんな「体形」などはじめから備わっていないということを、「私」は当然わかっているからだ。

ここにはテクスト外部から加えられる制約の存在も忘れてはいけない。高進六の主張は、基本的に当時の日本帝国―台湾総督府が皇民化政策のもとで喧伝していた皇民化の方法論の一つであり、語り手としてテクストの方向性を示す責任のある「私」が――そしてこの「志願兵」というテクストが『文芸台湾』というメディアに載って社会に公開される以上――その方法論を否定するような語りを行うことはできないからだ。ゆえに、公開されるテクストの語り手である「私」は、テクスト外部に向けて、高進六の主張に「体形」があり、張明貴にはそれがないという認識をアピールしなければならないのである。ここでは、

非論理的な主張が、植民地支配権力のバックアップによって論理性に優越しており、そのために議論とその評価がねじれているのである。

しかし一方で、そのような背景を「私」が張明貴批判に利用しているという事態も把握しなければならない。「私」は、語り手として高進六の「体形」の空洞性を表明することは出来ないが、その制約を自らに引き寄せることで、この時空内で自らを脅かす存在である張明貴の批判に転換させることに成功しているのである。

先行研究の多くは、ここで語り手である「私」が高進六に優位性を認める語りを続けることを持って、「志願兵」というテクストが皇民化政策を一方的に賛美してくようになると捉えているが、それは、「私」の持っているこのような戦略を見落としているからである。先に述べたように、「私」は透明な語り手ではなく、テクスト内に生身を持つ存在であり、そこでは皇民化政策賛美という抽象的議論よりも、「私」自身の身体感覚が優先し、絡み合っていることを踏まえなければならない。

青年間の断絶

ここで改めて張明貴の主張を通して見る時、実は彼が精神的な日本化については殆ど触れていないことに気づく。張明貴にとって、「日本人」になる、というのは、近代化した文明人になる、ということと、ほぼ同義なのである。それはこのような発言にはっきり現れている。

「君（高進六－引用者）の神人一致もいゝが、偏した考へは台湾の将来によくない。そんなものに振りまわされてはかなわない。僕はそんなもので台湾の中堅青年が育てられてゆくことに戦慄を覚えるんだ。現在でさへ我々は実にチツポケな人種ぢやないか。これは君だつて痛感するだらう。文化的レベルの極く低い人種だ。これはまあ仕方ないさ。教養と訓練がいままでなかつたもの。しかし皇民錬成が目下の急務ならその欠けてゐたところの教養と訓練をはやく与えてやればそれで用は足りるぢやないか。内地と同じレベルに引きあげてやりやいゝぢやないか。そのために何故拍手（ママ）を打つことが必要なのかい」

近代化を一切問題にせず、精神面しか主張しない高進六とは意見が全く異なるのはこのためである。実際この発言に対し、高進六は「君が言つてゐるのは文化の問題だ（略）僕のいつてゐることは精神の問題だ。日本精神の注入だ。」と返している。二人の問題意識のレベルが完全にずれていることが、ここに端的に表れている。

張明貴の発言を現状に当て嵌めれば、高進六はこの時点ですでに「教養と訓練」から見放されている人間であり、今後それを獲得することはすでに困難な人間でもあった。張明貴のいう「教養と訓練」とは、大部分が学校教育を指しているであろうからだ。つまり高進六は公学校卒で学歴が止まった時点で、「教養と訓練」を得る機会－近代化や文明化という経験時空から閉め出されており、故にそれらに価値を見出していない。むしろ、

閉め出された事によるルサンチマンを抱いていると言ってもいいだろう。

そしてそれが、高進六が「報国青年隊」に深くコミットしていく背景にもなっていると思われる。

高進六が所属している「報国青年隊」とは、勤行報国青年隊[30]のことであり、青年団組織から選抜された青年の団体である。

宮崎聖子が指摘しているように[31]、青年団という組織は、そもそも上級学校に進学できなかった青年たちに教育を施す機関として機能し、街庄(当時の台湾における町村にあたる行政単位)レベルでのエリート育成を目的としていた。ここでは、教育とそれによる上昇志向が低学歴層にまで浸透していたという事実と、上級学校へ進学できなかった青年層が固定的に集団化されていたということがわかる。つまり、高進六は、張明貴に対して劣等感を抱きかねない存在として現れているのであり、少なくとも「私」の語りの中ではそのようにされているのである。

勤行報国青年隊という組織も、「志願兵」では柏手を打って精神修養をしている組織、というきわめて単純な解説しかされないが――それは「私」と張明貴がその程度の関心しか持っていないということの現れだが――、一九四〇年二月一八日付の『台湾日日新報』で報じられた勤行報国青年隊組織設置の記事(見出しは「優秀な青年を選抜　勤行報国青年隊　兵営同様の厳格な訓練」)では、台湾各地の「男子青年団員又は幹部にして身体強健志操堅固なるもの」を選抜し、「学科、教練、作業及び行事を行」うとされ、そこには高進六がいうような神宮遥拝、宮城遥拝なども含まれているとされている。

しかし、ここで注目すべきは、夜間に一時間の学科授業、自習または音楽の時間がとられていることと、「入隊旅費、医療費、学科用諸印刷物、戦闘帽巻ゲートル一切が貸与」され、「小遣銭も与へられる」点である。一九四一年当時、台湾ではまだ公学校(国民学校)は義務教育化されておらず、教育費は有料であった。それらを考え合わせるとき、勤行報国青年隊への参加が、必ずしも建前通りの「報国」「皇民錬成」の為だったとも言い切れるだろうか。

現代においても、志願兵制を実施している国、例えばアメリカ合衆国において、志願兵を勧誘する際の非常に強い殺し文句は「学費を稼げる」という点にあるという[32]。そうでなくとも、軍隊において最前線に送られるのは、例外なくその軍隊を擁する国家における最下層に位置する青年たちである。高進六が生きていた台湾は、日本帝国型の近代に取り込まれる形で学校・学歴観が流入しており、その上に植民地出身者への差別が公的に行われていた時空であった。その中で、民族的出自に重ねて社会階層の上でも差別し蔑視されていた層に、高進六は属している[33]。

無論、本当の最下層の人々は、そもそも「日本語」の世界にすら立ち寄れなかったであろう。しかし、高進六の不幸はむしろここにあったのではないだろうか。彼は公学校に進むことができた。そして、そこで得た経験を元に、自身の所属する階層とは不釣り合いなほど見事な日本語能力を獲得し、その結果青年団に入団することができ、さらに勤行報国青年隊にも選抜された。この一連の過程は、高進六のプライドにもなったであろ

う。しかし決定的に知らされるのは、このような傍系のキャリアをいかに重ねようとも、決して張明貴や「私」の正統的学歴キャリアには届かないということである。

つまり、高進六本人にそのような意思がなかったとしても、彼の所属していた集団は不断に高学歴者に対するコンプレックスが醸成される環境であり、高進六はそのような場所を自身のよりどころとしていたのである。

そして、張明貴も議論が熱を帯びてくると、このようなコンプレックスを突く発言をし始める。彼には一度だけ「日本精神」について主張する場面がある。

「日本人になることがそんなに難しいことなのか、僕はさう難しいこととは思へない。二重橋に額づいてあの厳粛さに感激できればそれで充分ぢやないか。靖国神社に額づいてゐて、あのどうにもできない感激が出ればそれで日本人ぢやないか。（略）いまの若い男ならだれでもいゝ、宮城前へ伴れてゆきたまへ（略）」

これは一見、高進六並みの精神論ではあるが、持ち出されている場所が「二重橋」「靖国神社」「宮城前」であることが重要である。言うまでもなくこれらは全て「東京」に存在するものであり、高進六がそこを見るためだけに行けるような場所ではない。高進六では、おそらく内台航路の片道切符費を捻出することすら難しいであろう。張明貴のこの発言を受けて、場は「しーんとした瞬間」を迎えるのだが、それは高進六、及び「私」がその主張の正当性を認めたというのではない。ただ彼らは、張明貴が誇示した「東京在住」という特権性の前に気圧されたのだ。そして、そのような特権性を振り回した張明貴を「私」は「彼の眼は異様にギラギラ光るのだつた」と、まるで邪悪な者のように語るのである。

結局、張明貴は高進六の主張に対し、「僕は君の神がゝりなやり方ではたまらない」としか答えられない。これは「私」の語りを通した時、張明貴が論破されたことを承伏できずにすねているかのように見えるが、繰り返すように「私」の語りは張明貴に対して公平性を欠いている。ここで張明貴は、時空の制約によって高進六の主張への直接的な批判を口にすることが出来ないことに加えて、高進六の主張が「報国青年隊」で注ぎ込まれた情報の暗記・暗誦でしかないことにいらだちと絶望を覚えている。

「（略）あいつ（高進六のこと―引用者）は目かくしされた馬鹿みたいに盲滅法に走り出すんだ。それが僕にはやりきれない。あいつは一途に日本人だ、大和心だといふ。てんで批判なんどしない。それが僕にはやりきれない」

高進六との議論に数日後、「私」にこのように語る張明貴は、高進六がその暗記・暗誦の中に自分の意見を差し挟むこともなければ、相手の意見を受け容れるつもりもないスピーカー的な状態であるのをみて、議論が成り立たないことに見切りを付けているのである。

同時に、このような張明貴の姿勢は、彼自身のエリート意識とその反映である非学歴エリートへの蔑視がはっきり現れたものでもある。「私」に対する「ミイラ取りがミイラになった」という皮肉も現れているように、台湾の時空にいる時の張明貴は、やはり自らに「東京」＝中央の特権性を重ね合わせている。そしてそれによって台湾に住む人々への優位性を誇示する存在として振る舞っているのであり、その意味では、張明貴もまた、「東京帰りのインテリ台湾人青年」間に共有されていた情報を暗記・暗誦している立場にすぎない。

そして、そのような存在としてこの両者を語る「私」は、日本統治下の、皇民化政策が加熱している台湾において、自らの意見を表明することを諦めた人間となっている。「私」は張明貴と高進六の議論の中で、そこに細かい口をはさみつつも、最後まで自身の意見を表明しなかった。「私」は意見を述べるということを特に恐れている人間なのであり、張明貴・高進六よりも上の世代の諦観を象徴してもいるのである。

「私」と張明貴

しかし、張明貴が高進六との議論に倦み、彼の訪問を避けて「私」の元へやってきた時から、「私」は一気に自らの感情に従った語りを見せ始める。そこでは、台湾総督府の政策も日本帝国下の植民地出身者という制約もない、「私」と張明貴の二人の間のやりとりとなるからだ。ここで、「私」はその張明貴批判を大きく展開させていくことになり、その契機となるのが、張明貴の次の発言であった。

「（略）何故日本人にならなければならぬか。それを僕は先づ考へるんだ。僕は日本に生れた。僕は日本の教育で大きくなつた。僕は日本語以外には話しができない。僕は日本の仮名文字を使はなければ手紙が書けない。だから日本人にならなければ僕は生きたつて仕様がないんだ。」

これは垂水による指摘以降、「引き裂かれたアイデンティティ」の表出部分として、「志願兵」を論ずる際に必ずと言っていい程引用される部分である。

たしかに、この発言を単独で引用した場合、台湾人でありながら、日本人として生きていこうとする・日本人となることを強いられる青年の懊悩の表出として読むことが可能な部分であるだろう。しかし、問題はこれに続く「私」の語りである。

明貴は一いきに言つたが私はそれをきいてハツと胸をつかれた想ひがするのだつた。彼の考へてゐることはそんなことだつたのか。彼が目標をたててゐながら苦しまなければならぬのはそんなことなのか――私はへんに皮肉つた気持になつた。

この「私」の語りは、明らかに張明貴の発言を批判している。彼の発言の中に苦悩を読みとることはせず、張明貴の「日本人」化の動機が打算的なものであると嫌悪するのだ。それはこの後に続く、「彼は猶も薄笑ひを続けた。しかしそんな笑ひはもう狡

い笑ひだ。私は彼を弱々しい人間だとつくづく眺めたものだった」という語りにも現れている。

先行研究の理解と、語り手「私」の理解との間の、このような落差は一体なんなのだろうか。語り手「私」が故意に張明貴の苦悩を見ない振りをしている、のではないとしたら、張明貴の発言に「引き裂かれたアイデンティティ」の表出を見る、という理解の方を再検討しなければならない。その場合、張明貴と「私」の経歴を再度振り返る必要があるだろう。

張明貴が「日本に生まれた」というのは、彼が内地生まれなのか、日本統治下の台湾を「日本」と考えて上での発言なのかは判断できないが、「日本の教育で大きくなった」「日本語以外に話しができない」「仮名文字を使はなければ手紙が書けない」というのは、おそらくは「私」にも共通する事項である。

「日本語以外に話しができない」というのはレアケースだが、これも当時の台湾人社会の青少年にいないわけではなかった。例えば周金波のように比較的幼い頃から内地に渡っていたり、あるいは公学校ではなく小学校入学が許された場合などは、台湾語に接する機会の減少から、その言語能力が他の台湾人より伸びない、ということは考えられる。ただし、台湾語が全くわからない、という状況にそうそう陥るとも考えづらいので、ここでは、張明貴が事情を誇張して話しているとも考えられる。日本語理解者に対して（特に日本人に対して）、「台湾語ができない」「日本語しか話せない」と主張することは、台湾式の生活を離れ、日本式の生活空間で育ったことを表すという意味で、自らの教養の高さを示すものでもあったからだ。これはもちろん、日本式〉台湾式という植民地的な文化優劣論に従っての価値観であり、張明貴がそのような価値観に取り込まれていたことを表してもいる。

「仮名文字を使はなければ手紙が書けない」というのも、漢文教育を受けていなければ、表現手段が日本語しかないのは当時の台湾人インテリ層の中ではそれほど珍しいことではなかっただろう。「日本の教育で大きくなった」は、指摘するまでもない。

つまり、「日本人にならなければ僕は生きたつて仕様がないんだ」という発言は、自らを近代化したインテリと任じ、台湾に近代化・文明化・教化をもたらす立場にあると考えることで生まれているのである。このとき、近代化・文明化・教化はそれぞれ日本型近代・日本型文明・日本型教化が前提となることは避けられない。彼等台湾人青年は、それ以外の方法論を持っていないからだ。[34]

張明貴の「日本人」化が近代化・文明化とほぼ同義であったことを思い出せば、ここでの彼の発言は、台湾インテリ青年としてはそれほど特殊なものではないことが見えてくるだろう。つまり、「日本人」化＝近代化という価値観に支配されている張明貴にしてみれば、「日本人」性の放棄は近代性の放棄であり、それはすなわち、彼が努力して獲得してきた学歴に象徴される近代的文化資本を放棄することであって、そんなことを受け入れられはしないのである。

そのような張明貴を「私」が批判するのは、その張明貴が受け入れられない事態を受け入れてしまったのが、まさに今の「私」であるからだ。「私」は張明貴の存在自体によって自身の

台湾改善への挫折という過去をえぐられるのであり、また張明貴の存在自体が象徴する「近代性」と「先進性」への羨望と嫉妬を喚起されてしまうのである。

しかし、いくら過去の傷をえぐられ、羨望と嫉妬を喚起されても、「私」が現在の自分の立場を捨てて、かつての志に回帰することはない。それは、不満を抱きながらも台湾社会の現実に安住しているからかもしれないし、あるいはそれを理由にして逃げているのかもしれない。いずれにしても、「私」はすでに「諦め」ているのである。

故に、「私」は張明貴と高進六が「日本人」化について争っている様子を語り続けながら、自らの見解は語ろうとはしない。「自らの見解」なるものを、台湾人が植民地統治下の台湾で持つことの無意味さを受け入れているから。

このとき、「私」と張明貴は次のような会話を続ける。

「細かい計算だね。そこから割り出したのが君のたてた目標なんだな」

「いや、目標はその以前にたてられた」

明貴は顔に薄笑ひを浮べたがすぐに下を向けた。

「ぢやその計算は東京へいつてからやつたんだね。驚いたね」

「いや僕も実は我ながら驚いてゐるんだ」

彼は猶も薄笑ひをつゞけてゐた。しかしそんな笑ひはもう狡い笑ひだ。私は彼を弱弱しい人間だとつくづく眺めたものだつた。

ここで言われている「目標」とは、高進六との議論の対象でもある「日本人になること」であろう。ここに続けて、「私」は次のように語る。

彼がたてた目標に突き進むことができず不本意ながら道草ばかり喰つてゐたのもさういふ計算をしたために違ひない。しかしその計算にも結局割切れないものがあつたのだ。それは彼自身がいつてゐるやうに彼は生まれたときから日本人としてそだてられたからだ。いや生まれまへから運命づけられたことなのだ。その運命を彼は不幸にも東京で得たインテリの算盤で計算した。それが私の期待した綱渡りの芸当なのだらうか、さういふ期待を漠然ではあるが彼にかけたのは私が八年前東京生活に別れをつげたときの、いまもつて消えない感傷なのだらうか。

「私」はここで実に的確に問題点を指摘し得ている。

東京へ行く前の張明貴は、自身が「日本人」である（あるいは「日本人」になれる）ことを、疑う必要がなかった。それは台湾内部においては、学歴エリートであり社会的富裕層である張明貴よりも「日本人的」な台湾人はごく少数であったからだ。

それが、東京滞在によって変化する。台湾においては、台湾人は不断に「日本人」に劣る存在であるとされ、そして差別待遇を受けてきていた。それだけに、「日本人」になること（張明貴の場合は、近代人になること、であったが）はそれ自体疑う

余地のない目標となり得た。

しかし、しばしば指摘されるように、台湾人を支配し差別する帝国の中心であるはずの東京は、台湾に比べ圧倒的に寛容で自由な都市であった。さらにそこには、「日本人」でありながら、彼等台湾人青年よりも貧しく、能力にも乏しい人間が溢れていた。おそらく、張明貴はここで決定的な疑問を抱いたのであろう。「日本人＝近代人」「日本人＝支配者」という台湾における公式は、帝国の中心であるはずの東京では意識されていなかった。台湾人であっても近代人でいることは可能だったのだ。

「私」の世代に目を向けても、同じことが言えるだろう。一九二〇年代から三〇年代にかけての対日権利獲得闘争の主舞台は東京にあった。それは台湾では総督府の弾圧が激しかったからだという事情もあるが、逆に言えば、東京はそれだけ自由であったことの証明でもある。

そして、その闘争がいわゆる中国人意識から徐々に「台湾人」という意識に基づいたものにシフトしていく過程は、東京という異境においてこそ、彼等の民族意識が加速される傾向にあったことを象徴しているだろう。

張明貴や「私」が民族運動に関わっていたかは明らかにはされないが、張明貴の東京における心境の揺れはこのような「遠隔地ナショナリズム」の兆候を示しているといえる。その意味で、やはり張明貴は特殊な青年ではなく、そしておそらくは「私」ともさほど変わらない精神の履歴を持っているはずなのである。

しかし、にもかかわらず、「私」は張明貴に、先に述べた「綱渡りの芸当」を期待していたと述べる。日本にも台湾にも揺れることのない人間になることを期待する、というときの「私」が思い描く人間像とはどのような存在なのだろうか。

それはあるいは一種のコスモポリタニズム的な存在を意図していたのかも知れず、それこそ二〇年代三〇年代の大正デモクラシーから昭和初期にかけての思潮の影響が現れた意見であろうが、おそらく「私」の発想はそれほど深くはなかったのではないだろうか。「八年前」までの「東京生活」の「消えない感傷」という言葉からもみえるように、「私」の心を支配しているのは、実際には「綱渡りの芸当」ではなく、東京への尽きない憧憬なのである。

「私」は、張明貴が日本人になることは、「生まれるまへから運命づけられたこと」と述べている。これは張明貴だけでなく、「私」も同様であり、ひいて言えば、日本統治下台湾の全ての台湾人に突きつけられていた事態だった。そしてそのことが引き起こす摩擦・軋轢は、「日本人」の世界に近づく程、つまり日本語を学び、社会の指導層の近接するほど、大きくなるのは当然のことだった。

「私」は、そのことに気付いて然るべき立場の人間であり、だからこそこの指摘ができているのだが、しかし、それを自らを含めた台湾人全体への問題としては捉えず、張明貴個人の心の弱さに読み替えてしまう。

「私」は自身の感情的な問題と、テクスト外部からの制約とによって、このような「逃げ」を打たざるを得ない。ここで「引き裂かれたアイデンティティ」という問題を見つめ直すならば、

この部分にこそ、その急所が存在しているのではないだろうか。「日本人になる」ということがそもそも問題として浮上してきてしまう環境・状況は実際の台湾の中では限られていた。多くの市井の台湾人は、総督府の強圧にただ従うしかできなかったのであり、それを「アイデンティティ」の問題として捉えるという行為自体、そもそもインテリ層・富裕層に特有の問題であったはずなのだ。

志願する理由／しない理由

このような「私」と張明貴、そして高進六も含めた三者それぞれのレベルがかくも分断していくことのさらなる要因として、明貴が日本に発った時期、そしてテクスト内現在の帰台時期を見直してみたい。

一九四一年夏の「三年前」―一九三八年に張明貴は日本へ発っている。一方、台湾で皇民化政策が本格導入されたのは一九三七年以降である。それまでは陳培豊が指摘するように、台湾人インテリ層は、同化政策を近代化政策と捉えることで受容してきた。[35]だが、皇民化政策導入後は、この近代化の面は削り取られ、精神的宗教的な統合が強化されていく。

その意味で、皇民化政策は同化政策の強化されたものではなく、中身を大きく入れ替えたものだと認識しなければならない。[36]が、ここで張明貴に状況を還元してみると、彼は皇民化政策が本格化する前後に、日本へ発っている。つまり、彼が台湾で経験した「日本人」化とは、近代化と近い意味での同化政策に基づくものであって、「神がゝり」的な皇民化政策とは全く異なるものだったのだ。

一方、近代化という意味での「日本人」化政策から、学歴レースからの脱落によってすでに外れていた高進六は、皇民化政策によって拾われた形となる。総督府にとっては、権利要求や政治運動・民族運動に容易に振れる同化政策と比べ、皇民化政策の方が安全かつ有意義であったにちがいないのである。そして、ここで、高進六には張明貴より優れた「日本人」になる可能性が生まれるのだ。張明貴が高進六が理解できなかったのはこの点故で、張明貴の価値観に寄れば、「教養」も「訓練」もない人間が「日本人」になれるはずはないのである。

彼が不在であった時期に台湾では、日本語理解率が大きく伸びている（三七年・三七・八％から四一年・五七％）。[37]「私」はテクストの冒頭で高進六の学歴を間違えた。それは日本語能力が学歴に裏付けられたものであるという「私」の思いこみによるのだが、学歴が高い程よりすぐれた日本語を操れるようになる、というのは、台湾では普遍的な見方であった。しかし、皇民化期に強化された「国語学習熱」の中で、学歴に寄らずとも高い日本語能力を見せる人々が現れるようになる。青年団から勤行報国青年隊を経ている高進六は、まさにそのような皇民化期故に登場した人物なのだが、張明貴にしてみれば、この高進六の様な存在は異質だったのである。

台湾では、学歴は事実上豊富な資産を背景に獲得されるもので、つまり社会階層の上下と重なる部分が大きかった。東京留学ともなればなおさらである。「日本人」になるというのは、そのような自己投資の結果でもあったわけで、台湾人社会の階層

の動揺という点でも、張明貴は高進六の「日本人」化は受け入れがたかったであろう。

一方、そのような張明貴に象徴される学歴エリートに対し、常に劣等感に悩まされる立場にある高進六にとって、皇民化という形でもたらされる「日本人」化は、教育という自己投資を必要としない点で大きなチャンスであった。そして、さらなる大チャンスが、彼の前に示されつつあった。それが「陸軍特別志願兵制度」だったのである。

高進六が、張明貴を「論破」することに成功したあと、続けて行ったのはこの「陸軍特別志願兵制度」への「血書志願」であった。

このテクスト最後の行いが、かつては皇民化の生んだ狂気であるかのように読まれていたわけだが、「血書志願」という行為には、実はかなりパフォーマンス性が含まれている。

近藤正己によれば、高進六が所属していた勤行報国青年隊は志願兵の第一次募集に「全員志願」しており、うち一一四人が合格している(募集人員は一千名)。同隊はおよそ二百名ほどの隊員がいたので、合格率は五割程度となる。ただし、台湾の志願兵第一次募集の名目倍率は約四一八倍(事実上の強制志願によって、適齢期の青壮年男子の殆どが「志願」した形になっていた)[38]であったので、同隊の合格率は非常に高かったと言えるだろう。

ただし、近藤によれば、一九四一年九月時点での志願者数は五〇四一人で、倍率は五倍程度に留まっている。この段階ならば、高進六の合格率はまだずっと高いと推測できたであろうし、かつ、勤行報国青年隊にとって志願は「既定路線」として決まっている以上、わざわざ血書志願をする必要は本来ならばないのだ。

ここで、「私」と張明貴が高進六の「血書志願」を知ったのが新聞記事であったことに注目したい。例えば、一九四〇年二月一六日の『台湾日日新報』――勤行報国青年隊発足が伝えられる二日前――に、「血書、一身献納　本島人青年が軍夫志願」という記事がある。これは、軍夫の選考があることを選考会当日に知った台湾人青年が、採用してもらうために「血書した血潮も生々しい日の丸を係員に差し出し」「係員も痛く感激し当局に具申」したというもので、結果この青年は「見事」採用されたとある。

このように、「血書志願」には一定のニュースバリューがあり、そして実際に「血書志願」を行えばメディアに注目され「有名」になる可能性が存在していたのである。もちろん、ここで「血書志願」をそのような注目を集めたいという欲望に乗っ取った私的行動と断定するわけにはいかない。「血書志願」がニュースになる、ということは、一方で、ニュースとしての「血書志願」を求めている勢力がいたということになる。そしてそれは、言うまでもなく台湾総督府であり、日本帝国であろう。「血書志願」をすれば注目され、ルールを逸脱した形でも採用される可能性があり、その後も尊敬を集める―という空気が台湾に広められていたと想像するのは、それほど突飛なことではないはずだ。

先に指摘したように、「私」は高進六の心理を全く忖度しないので、果たして高進六がどのような意思に基づいて「血書志願」

を実行したのかはわからないが、友人であったはずの張明貴に対しても秘密裏に実行した点や、青年団員そして勤行報国青年隊員という立場を関連づけていくとき想像されるのは、いわゆる同化志向のインテリ・張明貴に対する対抗心ではないだろうか。志願兵となることで、高進六への、少なくとも建前上の評価は非常に高くなることは明白で、しかも新聞に大きく取り上げられ「有名」にもなる可能性もあるのだ。そして現実に、この後張明貴は高進六に詫びを伝えた。「負けてきた」のである。

「進六が血書志願したのを知つてるかい」
「いつてきた。いまその帰りだ。やるな、あいつは」
（略）
「いつて進六にあやまつてきた。負けてきた。進六こそ台湾のために台湾を動かす人間だ。僕はやはり無力な、台湾のためにはなんにもならない人間なんだ。頭でつかちだ。さういつてきた。（略）小指をやつは切つた。さういふ真似は僕にはできないんだ。僕は男らしく頭を下げてきた」

「私」との間でかわされた張明貴のこの発言もまた、強く注意して判断しなければならないものである。なぜなら、張明貴がここで「負け」ることには、何ら必然性はないからだ。彼には「負け」ないですむ方法もきちんと残されていた。張明貴にも、志願兵に応募する、という選択が残っていたのだから。

先に述べたように、志願兵制度は最終的に台湾の青壮年の大部分が強制志願の形で志願をさせられているので、実はやがて張明貴にも志願の日がやってくることになる。[39] がしかし、ここで張明貴が、自らも志願するという道を選ばず、簡単に高進六に「負け」ることを選んだことは非常に示唆的である。張明貴はつまり、自分の今まで獲得してきた学歴と肩書きという文化・社会資本を手放す気は全くないのであり、その意味で、彼は「負け」を認めることで自身の近代性を守ったのである。

四一年九月段階での学生の志願者は、五〇四一人中わずか三〇人、志願者構成比にして〇・六パーセントにすぎなかった。[40] ここに、非常に残酷な事実が「志願兵」に潜んでいることがわかるであろう。つまり建前上どれほど志願兵を賛美しようとも、所詮それは下層の台湾人が「なる」ものであって、インテリ層とは「関係のない」ものにすぎなかったという台湾社会の現実を、張明貴ははっきりと示しているのである。一方、高進六が血書志願を決行したのは、彼には守るべき資本などなかったことに起因している。台湾人青年間の、経歴による階層差が両者の志願する／しないを隔てたのである。

「これから僕は僕の叩き直しをやるんだ。だから義兄さんも応援してくれ」
と、明貴はこみあげてくる熱いものを甲走つた声で無理にもおし潰さうと試みてゐる風だつた。とつとつと三階へ階段を登りながら。
狭い階段では二人並んで歩けないので私は彼の後から登つていつた。彼は背が高い。遮ぎられて暗いので私は明るみを拾ひながら一段一段数えるやうに登つた。

かうしてゆつくり登つてゐると階段もなかなか遠いのだ。

テクスト末尾において、このように「僕も僕の叩き直しをやる」と宣言する張明貴であったが、しかし、志願兵に応募するとは口にしない。

そして「私」は、高進六の「血書志願」とそれに続く張明貴の敗北宣言の時点で、張明貴への批判を終える。先ほど指摘したように張明貴は「負け」ることによって自らの近代性を維持しようとしているのだが、その姿勢はつまり、「私」の在り方と同じ方向性を持っていたからだ。「私」は自身が台湾という場所に取り込まれてしまった、という形で「負け」を宣言し、それによって、内心と日常の慰めとしての近代を保持している。そのため、「私」は月刊誌[41]を買うし、張明貴と議論もする。そのような彼にとって、むき出しの近代性を示す張明貴は非常に不快な存在と化していたが、「血書志願」の高進六に「負け」たことは、張明貴が、少なくとも今後は公然と自身の近代性を誇示できなくなる時空にいることを悟ったことを象徴している。つまり、張明貴が「私」のレベルにまで降りてきたと判断するのである。

しかし、そのような状況でも、彼らはやはり同じ「階層」という枠組みでつながっていた。

「私」と張明貴は二人で階段を登る。「私」はそこで、「こうしてみると、階段もなかなか遠いのだ」と語る。そのとき、つい今し方、その「遠い」階段をあっという間に駆け上がった——はずの——高進六を、二人は全く参考にしていない。あくまでインテリ二人の上る階段は、着実に近代化・文明化を進めていく「遠い」階段という形でしかなかった。段をとばすような真似はしないのである。自らの「高み」をここに至っても実は疑っていない彼等にとって、そんな必要はなかったのだ。

周金波が「志願兵」に至るまで
——おわりにかえて

「志願兵」は「日本人」になるためには命をかける、というところまで追いつめられた当時の青年像を描いた、と読まれているが、台湾人の日本軍参加という構想自体は、志願兵制度が出てくる以前、対日権利獲得闘争の時期から、闘争団体である台湾文化協会右派によって提案されていた。権利獲得闘争の立場からすると、台湾人に対する徴兵制適用は、「兵役を免れている以上、権利も制限されて当然」という日本側の論理に抗う意味でも必要であった。逆に日本側としては、台湾人と日本人の権利的平等を拒絶したいという意図からも、台湾人の義務的徴兵は避けたいことだった。つまり、「日本人」になるための日本軍参加、という要求も、「志願兵」に突如現れた事態ではなく、台湾人インテリ層に内在していたものだったのである。[42]

にもかかわらず、「志願兵」が「皇民文学」という特殊性を認められるようになった第一の要因は、同時期における『文芸台湾』の方針に原因を求められるだろう。垂水が指摘しているように、「志願兵」が掲載された第二巻第六号の『文芸台湾』は戦争色の濃いテクストが多く掲載されていた。その中で「志願兵」

は巻頭小説となっているが、巻末は河合三良の「出生」で、こちらも志願兵制度を扱っている。兵役を終え帰台した竹田洋一の下に新しく雇われた公学校出の十七歳の少年・曾清福が、一九四一年六月二一日、志願兵制度発表の翌日に新聞を握って竹田の下を訪れ、「私でも兵隊になれますか」と訴えるところで終わるこのテクストは、中盤の展開（竹田が父親から相続した土地の処分についての問題）と結末の曾清福の志願希望の話があまり嚙み合っていない。[43]

この、結末に志願兵制度が唐突に現れるという展開は、同じ号の「志願兵」とよく似た構図である。ここで想像したいのは、このときの『文芸台湾』が、「志願兵」をテーマにした小説を、二人の作家に要求した可能性である。

「志願兵」の中では、勤行報国青年隊や志願兵制度への理解が十分ではない。テクスト中で張明貴は、東京で「台湾の新聞を見に行った」と話しているが、語り手「私」の理解もその張明貴の理解を超えてはいないのだ。

周金波が中学時代からの東京留学を終え、台湾へ戻ったのは一九四一年四月である。おそらく図書館に「台湾の新聞」を読みに行ったというのは、周金波自身の経験の反映であろう。そして、周金波も張明貴とほとんど同じ資産家家庭の東京留学経験者であるとき、彼が東京で青年団組織などの記事を自身にひきつけて読みはしなかったを示さなかったであろうことも容易に想像できる。

そしてそれは、志願兵制度に対しても同様であろう。父の歯科医院を継いだ直後に志願兵として出征しようという発想はなかったであろうし、それ以前から存在していた台湾人軍夫・軍属の出身階層から考えても、自分が志願を求められている立場の人間とは考えなかったはずだ。であるとき、周金波が、末岡が指摘するような強い関心[44]を志願兵制度に感じたかどうかは疑問である。

ならば、周金波が志願兵制度発表に「感激」し、その内なる要求に従って「志願兵」を書いた、という理解は、仕立てられたドラマなのではないか。先にも挙げた周金波の講演録「私の歩んだ道」の中で、先行研究でも頻繁に取り上げられるのは、

> 昭和一六年六月二〇日、待望の志願兵制度の施行が発表されました。私はこの日の日記にこう書きました。
>
> 私はこの日ほど自信に満ちた喜びを感じたことはない、私は長い孤独の殻から抜け出せそうだ。実際の台湾経験は通算しても十年に満たない、東京震災後台湾に引き上げたときは四歳で片言の日本語しか知らない、一四歳、上京したときは日本語は再勉強しなければならなかったが、日本語は上達するにつれて台湾語を徐々に忘れていった。そして、私は台湾の社会面とはいつも外れている。接触点などあっても密着しない。真実面を映し出すことができない。日本語が半端なら台湾語も半端だ。文章を書くのは畑違いである。書いていること、言っていることはほんとうに共鳴を得ているのではない。みんなウンともスンとも言わない、反応のない無言の大衆だ。

それが六月二〇日、志願兵制度の発表によって一変しました。みんな生き生きとした表情になり、多弁になり、真実をさらけだしました。私たちは何のためらいもなく面と向って「密着」しました。精神の高揚からくる同じ高さ同じ強さが、「密着」を可能にしたのです。やっと、孤立の殻を抜け出した、と思いました。志願兵制度には台湾人の願望がかけられていて、皆、一途にある完全なるものを目指した、真剣な眼差しでした。

という発言部分であるが、この発言をそのまま、この時点で五十二年も前に書かれたテクストに還元するのは流石に乱暴な所作であろう。[45]

本稿の冒頭で、葉石濤の文学史叙述が政治・社会体制によって揺らいでいたことを取り上げたが、ここでは周金波の発言にも同じ様な揺らぎの可能性を想定しなければならない。戦後の『皇民作家』というレッテルと創作の断念という事態が周金波の心理に影響していないことはないであろうし、一九九三年、それまで台湾では無視され続けていた周金波が、突然日本で半世紀前の文学運動について「語り」を求められたとき、彼の言葉が半世紀前の感情・感覚をそのまま伝えていると考える方が無理がある。彼が半世紀もの間、自身の選択を後悔することはなかったのか、半世紀間ずっと「志願兵」を書いて良かったと思い続けていたのか。そのようなことを想像するとき、周金波がこのとき「志願兵」当時と相似する発言をする、それ自体が日本統治とその子孫達への皮肉になっていたとも考えられないだろうか。

五十年後、だけではなく、戦前に「志願兵」発表後の周金波も、志願兵制度賛美とその意志に従って「志願兵」を書いたことを表明している。[46] しかし一方で、星名や中島によって、少なくとも「志願兵」以降の周金波のテクストは親日的体制的と判断される内容からはずれていることもすでに指摘されている。であるならば、同時に周金波の志願兵制度賛美の姿勢自体にも、再検討が必要なはずだ。

もし、『文芸台湾』編集サイドから、話題の志願兵制度をテーマに小説を書いて欲しいと頼まれた時、同誌でデビューしたての青年作家であった周金波は、それを断りはしなかったのではないだろうか。「志願兵」は発表直後から『文芸台湾』編集サイドによって過剰な意味づけをもって評価されており、当時の周金波の立場では、そのような編集サイドによるキャンペーンを拒否することは不可能であっただろう。彼が作家として『文芸台湾』によるならば、編集サイドに意に添った、「志願兵制度を賞賛する台湾人作家」という位置から逃れることはできない。同時代的に見れば、志願兵制度を賞賛することに罪悪感は殆ど生じなかったであろうし、すでに軍夫・軍属という形で多くの台湾人が戦場に動員されているという事実もあった。その上、軍夫・軍属の出身層を考えても、志願兵制度ははっきり言って周金波とは無縁の制度であったのだから。

大学卒業と同時に親の決めた相手と結婚、そして父親の後継、という当時の周金波が迎えていた状況は、三〇年代までのイン

テリ台湾人青年たちの、特に作家志望者の中で最も軽蔑されていた事態である。東京帰りであった青年・周金波にも同様の感慨があって然るべきだろう。つまり当時の彼には、自身の目の前にこそ、「赤煉瓦」の呪縛が控えていると感じられたはずだ。

そのような時に「文学運動」という近代的活動に誘われ、そこで評価と賞賛を受ける、しかもそれは体制側からも承認を与えられ、活動サークル（『文芸台湾』）も体制にコネを持ち環境も（台湾人作家主体の『台湾文学』に比べて）安全――これ以上に魅力的な条件を、当時の周金波が見つけることはできなかったのではないだろうか。

しかし残念なことは、この破格の好環境にあった故に、周金波は、「志願兵」の中で批判の対象にあげた自身の先輩世代の台湾人作家たちとの交流の機会を失ったことである。活動誌をほぼ『文芸台湾』に絞っていた周金波が直接交流をもったのは在台日本人作家たちが中心になった。そしてその編集人の西川満らによって「志願兵制度礼賛」「皇民文学」という意味づけが強化され続けてしまった。それは現在の視点で言えば、その僅か数年後に日本統治が崩壊し、彼の文学的庇護者でもあった在台日本人作家たちが台湾を去ったとき、周金波をかばい、評価する人間が居なくなることを意味していた。

だから、周金波とそのテクストが特殊性を強調されるとするならば、彼が台湾人作家たちとの接続をもてなかったことにこそ、注目しなければならないだろう。

「志願兵」の中で、「私」の示す語りは張明貴に対して冷淡で批判的であり、それが感情的な理由であることも明らかであった。このように「明らか」であることが容易に伝わるという時点で、「作者」周金波の手は「私」に対する共感を欠いている。

自身に最も近い立場であるはずの張明貴を語り手に据えず、また語り手に据えた先輩世代の「私」の価値観を強調せず、皇民化青年の高進六を尊重しているように見せながら実際は無関係な存在として放置している「作者」周金波の戦略は、植民地下という状況に対する批判的意識を欠いてはいるけれども、台湾社会における階層の断絶を見出しているという点で重要な意義を持っている。このとき、志願兵制度はその断絶をあぶり出す装置にすぎない。そしてこのような周金波の持つ批判意識は、周金波にとっての先輩世代、つまり『台湾文学』派の中心作家たちと接続することで、より大きな価値をもたらしただろう。

『台湾文学』も、台湾人作家中心であったことが、現在まで評価対象として謳われているが、その中心世代は一九一〇年前後生まれの人々であって、その次の世代、一九二〇年前後生まれの台湾人新人作家は、むしろ『文芸台湾』から登場することの方が多かった。そのことを、単にそれらの作家個々人が体制に寄った、「皇民文学」に走った、とくくり、『台湾文学』側の優位性保持に固執するのではなく、なぜ、それらのより若い世代の作家、例えば周金波が『文芸台湾』[47]に寄ったのか、何故『台湾文学』が彼を吸収し得なかったのか、をも含めて、検討し直す段階が来ているのではないだろうか。

（1）一九四〇年一月に台湾文芸家協会の機関誌として創刊された総合文芸誌。一九三七年に当時の文芸同人誌『台湾新文学』が経営難と

台湾総督府からの漢文記事掲載禁止措置によって廃刊になった後の最初の文芸誌であった。編集の中心は経営権をにぎっていた西川満（一九〇九－一九九九）で、後に西川のパーソナリティが原因となって、同誌は一九四一年に『台湾文学』との分裂騒動を起こす。

（2）周金波は一九九三年、中国文芸研究会において行った講演「私の歩んだ道－文学・演劇・映画」の中で、「昭和十六（一九四一）年二月、日大歯科を卒業しました。父は、待ち構えていたように矢の催促でした。日大歯科の卒業で、私の楽しい日本でのこの九年間がおしまいになるわけです。六月に婚約者李宝玉と挙式、一二月八日に太平洋戦争が勃発しました。」と述べている。本稿では、『周金波日本語作品集』（中島利郎・黄英哲編　緑蔭書房）に収録されたものによった。

（3）中島利郎は、「周金波新論」（『台湾文学の諸相』呷哑之会編　緑蔭書房　一九九八）において、「（略）周金波のみが、「皇民文学」「皇民作家」とのレッテルのもとに小説は勿論その人物までもが台湾文壇では紹介されることはほとんどなかった。いまに至るまでその小説の漢訳は一篇もない（略）」と述べている。同じ論文内に「（最近「水癌」「『ものさし』の誕生」が漢訳された）」という記述はあるものの、九〇年代に入るまで、台湾では周金波のテクストは殆ど読まれることがないまま非難にさらされていたことを示している。

（4）「戦後」という表現が一九四五年八月一五日以降の時間を指すという理解は日本においてのみ有効な概念であって、東アジアで共有されているものではない。故に近代の台湾を語る際に「戦後」を安易に用いることは注意しなければならない。しかし一方で、日本における「戦後」という術語の普遍性も否定出来ない。よって本稿では、台湾を日本の時間軸支配のもとにおく意志はない、と断った上で、「一九四五年以後」という意味で「戦後」と表記することをお断りしておく。

（5）日本統治期台湾の日本語テクストのように、戦後入手・閲覧が一般には困難になったテクストを論じる際には、同時に同じ数だけの「あらすじ」が生成されることになる。しかし、「あらすじ」はその論文の書き手の筆によるものである以上、その論拠に沿った形に「創られる」ことは避けられない（それは本稿も同様である）。故に、論文に現れる「あらすじ」の「書かれ方」自体にも検討が必要となる。しかしここでは、先行研究において「志願兵」の「あらすじ」が構成される時、すでに本稿が指摘する箇所は落とされていることを述べておくに留める。

（6）「台湾意識」とは、近年急速に高まってきた「台湾人」という枠組に依拠するナショナリズムを指す。「台湾人」という枠組が日本統治期の差別政策、同化・皇民化政策の過程で生じ、戦後の国民党統治下における「中国人」化政策に対する抵抗の中で成長したものであり、同時に台湾領域の国家的帰属自体がいわゆる「一つの中国」問題の最中で揺らいでいるという状況下においては、単なる「ナショナリズム」とは言い切れない複雑さを持っている。故に、これは「台湾人意識」「台湾ナショナリズム」と表記されることもままある。ここではそのような重層性をを指摘しつつ、表記を「台湾意識」に統一しておく。

（7）中島利郎「つくられた「皇民作家」周金波－遠景出版社版『光復前台湾文学全集』をめぐって」（『台湾文学研究の現在』緑蔭書房　一九九八）を参照。

（8）『台湾文学史綱』（文学界雑誌社出版　一九八七）は、日本統治期に「日本語文学」活動にも関わっていた葉石濤（一九二五－　）が、国民党統治下の台湾で完成させた代表的著作である。現在では台湾文学史の正典と認められている同書は、故にその記述による規定が支配的に扱われる傾向がある。しかし、中島も前掲「つくられた「皇民作家」周金波」で指摘しているように、葉石濤の発言や記述は時代背景に沿うように変化している。もちろんその変化とは、日本統治、国民党統治、台湾意識の高揚といった、台湾の各時代における強制と激流による部分も大きいのだが、その記述に対する検討も必要である。ここでは、その日本語訳『台湾文学史』（中島利郎・澤井律之訳　研文出版　二〇〇〇）によった。

（9）葉石濤前掲書・七二頁参照。

(10) ここでいう「郷土文学論争」とは、一九七〇年代の台湾で起きた論争を指す。台湾の七〇年代とは、中華人民共和国の国際舞台における存在感が強大化する中、「中華民国」として得ていた国際連合の議席に代表される地位を次々に喪失し、国際的孤立に向かう一方、台湾経済の発展とそれに伴う民衆の政治的権利要求の高揚などが重なり、台湾が台湾大で大きな変化を迎え始めていたという時代であった。ここで、虚構的な「中国文学」ではなく台湾に根ざした文学を目指そうという主張が台頭して起きたのが、「郷土文学論争」であり、その渦中で、日本統治期の日本語文学が「発見」されることになる。

(11) 「もう一つの皇民文学・周金波」(『野草』四九号　一九九二年二月)。星名の場合、「皇民作家」としての周金波像をその一連のテクストから批判し別の側面を指摘することに成功しているが、「志願兵」の「皇民文学」性は肯定している。

(12) 「周金波論」(『日本文学』四一号　一九九二年九月)。ここでは、垂水千恵『台湾の日本語文学』(五柳書院　一九九五年)に加筆掲載された「台湾人作家のアイデンティティと日本」によった。

(13) 楊逵(一九〇六－八五)は台湾の「日本語文学」における代表的作家。一九三四年一〇月に東京の『文学評論』に掲載された「新聞配達夫」は、内地で発表された最初の台湾人による小説とされている。文学運動だけでなく、農民運動・労働運動の闘士として活動したことも合わせて、今日まで非常に高い評価を受けている作家である。

(14) 呂赫若(一九一四－一九五一)は、楊逵に続く形で一九三五年一月の『文学評論』に「牛車」が紹介されたことで知られる「日本語文学」作家。四〇年には声楽研究のため東京生活を経験するなど、多才でも知られていた。戦後、山中でゲリラ活動をしていたところを毒蛇に咬まれ死亡した、と言われている。

(15) 張文環(一九〇九－七九)は、一九三二年に東京で在京留学生によって結成された台湾芸術研究会創設者の一人。以降、三〇年代の「台湾新文学運動」期を経て、四〇年代の「日本語文学」活動にも参加。『台湾文学』が『文芸台湾』から分裂をした際には、その編集人として代表となった。「風俗作家」と称されることの多い張文環は、台湾下層民の生活を描いたテクストを中心に高い評価を得ている。

(16) 『台湾文学』は、『文芸台湾』の運営方針及び実質的運営者である西川満に反発した台湾人を中心とする同人が一九四一年五月に創刊した季刊文芸誌。一九四三年、台湾決戦文学者会議の後停刊し、『文芸台湾』と統合されることになった。その主張は、台湾文壇建設・台湾文化の維持成長・リアリズム・リベラリズムなどにあったとされている。

(17) ここで言葉を割くには問題が大きく深すぎるが、本稿の筆者は、旧宗主国の国民として、戦後の繁栄と平和を一方的に享受し、「日本人」というナショナルアイデンティティに安住してきた立場の人間として、戦前・戦後の台湾が被ってきた数多の困難の中から発生した台湾意識を批判することが道義に叶うのか、という思いは払拭出来ない、ということだけは述べておきたい。

(18) ここでは、『文芸台湾』第二巻第六号・一九四一年九月の初出本文を元に論じる。

(19) 中島は前掲「周金波新論」の中で、「「私」の存在感は張明貴や高進六に比べるならばかなり薄い」「周氏の視点が「私」の視点ではない」と述べている。垂水も前掲論文の中で、「私」と張明貴は同じエリートという枠組でとらえ、その上で張明貴と高進六それぞれの分析にシフトしていく。末岡麻衣子は「周金波研究」(『日本台湾学会報』第六号　二〇〇四)で、張明貴と高進六を「物語が始まる前から台湾古来の伝統や文化から離れた人物であり「私」とは全く異なる人物」とし、論と共に張明貴と高進六を次第に混同させている。

(20) 改姓名は一九四〇年二月に施行された、台湾人の姓名を日本風に改名する制度。許可制であり、国語常用家庭、皇国民としての資質、などが問われた。その他の条件もあり、実際に改姓名を申請する数は多くなかったという。近藤正巳『総力戦と台湾』(刀水書房　一九九六)「第三章　人心の動員」を参照。

(21) ここでいう対日権利獲得闘争とは、一九二〇年代以降の台湾議会

設置請願運動に代表される、日本統治下における合法的運動を指している。

(22) 『台湾文学』二巻四号・一九四二年掲載。

(23) 『台湾文学』三巻三号・一九四三年掲載。

(24) 単行本『清秋』(清水書店　一九四四)に書き下ろされたテクスト。以上三テクストは、全て『台湾文学』派の手による。「中央文壇志向」を攻撃し続けた『台湾文学』によった台湾人作家の多くは東京留学経験者であり、またテクスト内部でも東京への「想い」を書き続けていたことは示唆的である。

(25) 「T中」について、垂水は前掲論文の中で「恐らく当時のエリート養成校であった台北中学」と述べているが、台北にはこの当時すでに台北第一中学校と第二中学校があった。また、イニシャルが「T」となる中学と考えると、台中一中・二中、台南一中・二中、高雄中などもある。私学で言えば、淡水中学もあった。基隆の青年である「私」や張明貴が台中以南の学校へ行った可能性は低いが、このテクストからは「T中」を特定するのは不可能であろう。ここで注意すべきは、何処の中学校であれ、当時の台湾では中学校を卒業する時点で、台湾人としては突出した学歴となったという点である。

(26) 台北高校から東京帝大を経て戦前に判事となった王育霖(一九一九－四七)は、一九四二年、母校台北高校の文芸誌『翔風』二四号に「台湾随想」を寄稿し、その中で「東京帰りの某君が言った。／「東京－内地－に来てゐる連中の中で、ほんとうに勉強してゐるのは十分の一あるかないか位だ。官立の学校の学生はまだよいが私立と来たら、大部分それこそ真の遊学だ」と。／それでも内地遊学、東京遊学はやまない。かへって多くなる位である。父兄は勤苦倹約して学資を送り、学生は東京へ、東京へ、そして東京遊学へと出かけて行くのである。」と述べている。旧制高校－東京帝大法学部と、正統学歴エリート中でも屈指のキャリアにあった王育霖の共同体内の言説では、官立校でなければ東京留学者は「遊学者」にすぎないものとされてしまう。

(27) 垂水前掲論文を参照。

(28) 「私」は中学校を卒業しているので、最短でも卒業時は十七歳(五年制中学校は四年修了時に旧制高校受験資格が得られるため)となる。ただしその場合は旧制高校－帝国大学へ進むことになるので、終了時には二十四歳となる。十八歳で卒業し、私立大学へ入学した場合、医学部は四年制、それ以外は三年制。中島は、「私」は医学を修めている、としているが、テクスト内で「私」は「店の帳簿の整理」をしている以外に職業を示す記述はなく、これは誤っている。張明貴も三年で帰台の時を迎えているので、少なくとも医学部ではない。故に、ここでは「私」の最短最終学校卒業を三年とみて、卒業時二十一歳とする。その場合、「八年後」のテクスト内現在では二十九歳となる。台湾人の場合、公学校(初等教育機関)への入学が遅れたり、日本語での受験準備の不利などによる浪人もあり得るので、三十代前半である可能性も高い。ただし、三十代後半まで進学がずれ込むことはなかったのではないだろうか。

(29) 三〇年代の台湾人インテリ青年像が示す台湾改革意識について、筆者は二〇〇四年の日本台湾学会第六回学術大会において分科会「日本統治期台湾における「恋愛」「結婚」を巡る言説の行方」の中で「描かれる『恋愛』『結婚』」という題で言及し、同分科会を通じて議論している。『日本台湾学会第六回学術大会報告者論文集』所収。

(30) 勤行報国青年隊は一九四〇年二月に結成された。「主眼は「勤労奉仕生活訓練により日本精神の真髄たる滅私奉公の精神を体得せしむると共に、其の心身を錬成し、以て皇国臣民たるの資質を完成しむる」ことにあった」(近藤前掲書「第五章　人力と人命の動員」参照)という。同隊には、「二〇歳前後の青年団員や従軍軍夫を選抜」し、「選抜にあたっては台北州では「中堅幹部たり得る者」の人物、身体、家庭状況を調査して選出者名簿を作成した」(近藤前掲書同章)

(31) 宮崎聖子「植民地期台湾における青年団――一九三五－四〇年の漢族系住民の青年団を中心に――」(前掲『日本台湾学会第六回学術大会報告者論文集』所収)を参照。

(32) 「華氏911」(マイケル・ムーア監督　二〇〇四)では、マイケ

ル・ムーアのインタビューを通じて、イラク戦争に動員されたアメリカの志願兵達の出身階層・志願動機・志願兵勧誘の状況が描かれている。また、「華氏911」を通じての同様の指摘はノーマ・フィールド「戦時下の大学教室で原爆を考える」(『前夜』創刊号　二〇〇四)でもなされている。

(33) 中島前掲論文「周金波新論」でも、張明貴と高進六の階層差の指摘がなされており、高進六の血書志願は「庶民がこの差別と乖離とを一気に飛び越えるため」であったと的確に述べている。しかし、ここでは高進六の血書志願と張明貴の「敗北宣言」を、「庶民である進六の体内に流れる血に、知識人である明貴は屈服したのである。」と解釈し、そこから論を周金波が庶民=台湾人庶民一般=故郷台湾を「見つめ直す新たなる眼」を得た、とテクスト外の周金波に還元してしまい、高進六と張明貴の関係性の深みには立ち入らずに終わってしまう。

(34) 中国大陸への留学という選択肢もあり、その道を選んだ台湾人もいたが、そこには抗日運動参加という因子が強く働く傾向があり、「近代化」を求める志向とはベクトルが異なっていたのではないかと思われる。

(35) 陳培豊『同化の同床異夢』(三元社　二〇〇一年)「第六章〝文明の中へ〟そして〝(日本)民族の外へ〟」及び「第七章〝民族の中へ〟、さらに〝民族の中へ〟」を参照。陳は皇民化運動以前までの同化政策に対する台湾人インテリ層の態度を「抵抗しながらも受容」と表現し、日本語教育も近代化吸収の手段のため受容しようとしていた当時の彼等の姿勢を指摘している。同化政策と皇民化政策とは、精神・習慣・文化への介入のレベルにおいて明らかに違いがあることを陳も認めている。

(36) 台湾に同化政策が本格的に導入されたのは、日本内地で原敬内閣が成立し、田健治郎が初の「文官総督」として台湾に赴任し、内地延長主義が統治の基本路線として確定した以降である。内地延長主義については、若林正丈『台湾抗日運動史研究　増補版』(研文出版　二〇〇一年　但し初版は一九八三年)の第一篇第二章「内地延長主義と「台湾議会」」を参照。「制度先行のアプローチをとる(あるいはとることができた)点で、同じく「同化」を語るものではあれ、植民地民族の風俗習慣にまで行政が介入し、住民の「教化」に著しく重点をおいた日中戦争期の「皇民化」政策のアプローチとは、はっきり異なる」というのが、原-田ラインの内地延長主義による台湾の「同化」政策方針であった。

(37) 藤井省三「〝大東亜戦争〟期における台湾皇民文学―読者市場の成熟と台湾ナショナリズムの形成」『台湾文学この百年』掲載の「日本植民地下台湾における日本語理解者」表を参照。

(38) 近藤前掲書第五章を参照。台湾の志願兵制度への志願者は社会的な様々な圧力の中で水増しされ、太平洋戦争開始後の第一回締切(一九四二年三月)には一千名の募集に対して四二万一六〇六人、四二〇倍超というおそろしい倍率を示した。

(39) 近藤前掲書第五章を参照。

(40) 近藤前掲書第五章を参照。

(41) 「私」はテクスト前半で「台北で発行される月刊雑誌を三部選びだして明貴の家を訪ねた。」と語っているが、読者がここで想起するのは、「志願兵」が掲載されている『文芸台湾』であっただろう。

(42) 近藤前掲書「第一章　軍事勢力による戦時体制の醸成」を参照。

(43) 河合三良「出生」には、例えば戦場からの帰還兵が(比較的)平和な台湾・台北の日常に復帰したときに覚える戦場とのギャップや、戦場帰還兵と社会との関係性を描くなど、同号掲載の「志願兵」とは別の意味で重要なテクストである可能性を秘めている。いずれ「志願兵」との関係性も含めて検討しなければならないテクストであろう。先行研究としては、稲本朗「日拠時期台湾における日本文学――河合三良「出生」――」(『国文研究と教育』第21号奈良教育大学国文学会)がある。

(44) 末岡は前掲論文の中で、「(略)周金波にとって「志願兵」執筆時の問題は志願兵制度の是非や植民地統治の是非には無く、むしろ、志願兵制度実施の発表に対応しようとする本島人集団へ同調し、自分が参加できる共通の場を見出して本島人集団の一員となることに

あった。ようやく台湾に根を下ろせるようになったという喜びが彼をして「志願兵」を書かしめた、と言えるだろう。」と述べている。しかし、周金波が同調し参加しようとしていたと末岡が指摘する「本島人集団」の中身や質的な問題は検討されていない。当時の台湾内部の台湾人が単一の共同体を形成していたいう前提に基づいたこの指摘は、台湾内部の階層・社会・文化・学歴格差を考慮していない点で不備がある。

(45) ここで周金波が「引用」している「日記」も果たして四一年六月二〇日の記述そのままであるのか、リライトしたものなのか、講演録からは確認出来ない（日記は現在まで公開されておらず、存在も確認されていない）。しかし「日記」といいながらも自身の東京時代までを概説するようなこの記述が本当に一九四一年六月二〇日付の日記そのままであると信じてよいのか、疑問を覚える。

(46) 周金波は、台湾総督府情報局が発行していた『台湾時報』（二六六号・一九四二年）に掲載された「欣びの言葉」という随筆、そして『文芸台湾』（第七巻第一号・一九四三年）の「徴兵制をめぐつて」という座談会記事の中で、それぞれ志願兵制度を賛美する発言を繰り返している。

(47) 台湾人作家の中で『文芸台湾』に残った龍瑛宗と楊雲萍も、一九四二年に『台湾文学』へ移籍している。しかし、周金波にはそのような気配は全くなかった。